



TITLE:

吾が父の追憶

AUTHOR(S):

山本, 一清

---

CITATION:

山本, 一清. 吾が父の追憶. 天界 1927, 7(81): 505-508

ISSUE DATE:

1927-11-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/161206>

RIGHT:



## 吾が父の追憶

山 本 一 清

去る10月1日に父が病死しましたにつき、遠近の人々から弔辭弔電其の他いろいろの御厚意を頂きましたことを深く感謝します。

父は慶應元年(1865年)の生れでありますから、數へ歳63で世を去つたわけであります。其の一生を殆んど全部教育界に捧げた人ですから、先輩や同勞者と共に、可なり多數の子弟を持ち、交友は比較的廣い方でありました。病中にも、葬儀の節にも此うした人々が遙るばる來られて、肉親にもまさる世話をして下さいしたのは有難いことでありました。

子は四人で、私は長男、他の三人は私の妹であります。其のうち、末の二妹は既に死にました。最も末の妹さいふのは今から19年も以前に僅か5歳で死んだのですから、誠にいぢらしく、又、あつけないものでありました。二番目の妹は相當な年齢まで生きて、結婚もし、二人の小兒まで生んだのち、急死した夫の<sup>おつこ</sup>悲哀の中に、すぐ其の<sup>おつこ</sup>あそを追つて死んだのが去る大正14年の4月でありました。此の妹は父が親しく看護を盡した後、遂に死んだのでありますから、父の悲嘆は極めて深くありました。そして此の事あつてのち、もともと元氣であつた父は、心身共に、急に衰へました。今年の春頃からは可なりな病態となり、實は、私が彗星觀測のため、6月に滿州に行きました時なき、私は父の身の萬一を覺悟して、妻に後事をいろいろ託して出發した程でありました。それが、8月の末から床につき、尿素症で、初めから意識は殆んど無く、——その代り、一ヶ月ほ病臥の間、あまり苦悶もなく、死に至りました。

子として、私さもが幼時から育てられた事がらを、こゝで記すことは

ひかへます。

私が今の身となり、今の仕事を持つやうになりましたについて、父のほんごうの逸話とも言ふべき事があります。父は教育者として又多少の學究者として、——殊に明治初年の新學時代に人となつたがためか、——西洋から渡來するいろんな文化要素に對して可なり熱烈な好奇心(?)を持つて居ました。よほ若い頃から一二冊の聖書を持ち、<sup>みなみち</sup>其の小形のものを、散歩の時にも持ち歩いて、或る章節を高聲に讀みながら田舎道の上に歩を運んだ事も稀ではありませんでした。「アブラハム」や「イサーク」の名を、こうして私は幼年時代から聞き覺えました。尤も父は遂に死に至るまで基督教の信者にはありませんでしたが。

又、父は天界の現象に深い興味を持つてゐました。但し、此の方面に於いては、父は何も系統的な教育を受けず、又、まごまつた書物を讀んだといふわけではありません。今の言葉で言へば、まづ「新聞學問」といふ程度であつたのでせう。しかし、とにかく、時々、新聞雜誌などに載せられる天文界の記事には頗る熱心でありまして、當に其れを以つて友人間の座談を賑はされたばかりで無く、一步進んで、親しく天の珍現象を觀察するために力めたやうでありました。單に私一個のかすかな記憶をたゞつて見ましても、いろいろの事があります。私が、珍らしい天文現象として最初に見せられものは、かの、明治29年(1896年)8月9日の日食であります。當時私は小學校の尋常一年生でありましたが、滋賀縣の片田舎で、二三の友達と共に、私は父の説明を聞きながら、日中の天空に、まん丸い太陽が缺けて行く景色を見ました。いぶしガラスや、水盥など、簡単に日食を見る準備は、父が數日前から、チャンと、して置いてくれたものでした。尤も、此の日の日食は、我が國の北海道では皆既食であつたのですが、内地では一般に部分食が見えたに過ぎませんでした。しかし、珍現象として世人を喜ばすには充分でありました。

つぎには、明治32年(1899年)11月の中頃、有名な獅子座の流星群が世人を興奮させました。33年ぶりにすばらしい流星雨が天一ぱいに見えるといふ豫想で、世界中の専門學者は待ちに待つたものでしたが、此の事は當時

の新聞や諸雑誌にも盛んに載せられて、「地球が破滅する」なご誤解困惑した人々も世間には少なからずありました。其の頃も、父は此の事件に注意を怠らず、一方に於いて世人の誤つた惑ひを説明するに力めるご共に、晴れた夜には、夜半以後の深夜にも起きて、毎夜、熱心に天を眺めました。當時の現象は、専門家たちが豫期して居たほごには多くの流星が現はれなかつたご言はれて居りますが、私が自ら、父ご共に起床して、暗夜の天空に見た記憶に據りますご、やはりなかなか夥しい流星が飛んだごを覚えて居ります。

明治34年（1901年）には冬の末頃ペルセ座に新星が現はれました。之れは西洋でも日本でも新聞紙なごで多少記載されたやうであり、父も此等の記事により、問題の星を見やうご試みたやうでありましたが、なにぶんにも恒星界の事であり、それに、當時の父は一枚の星圖も持つて居なかつたので、遂に此の星を見わけるところは不成功であつたやうです。私は當時高等小學校の第二年生でありましたが、父が此の星の話をしてゐるに拘らず、實際之れを見た覚えはありません。

明治35年（1902年）の春から私は父母の膝下を離れて、中學校に入り、學校の寄宿舎に起居するやうになりましたため、父から直接に教へられる天文教育は一時中止の姿ごになりました。其の間にも、日月食や彗星なごが一二度は見えたやうでありますが、父は、わざわざ手紙をよこして、「此の頃、天空の何々の邊に某々の星が現はれてゐるから、見よ」なご私に注意するほご熱心でなかつたのでせう（？）

明治40年（1907）の夏、東方の曉天に見事な彗星が現はれました。米國のダニエル・イ・フ人が發見したものでありますが、ちようご此の星が見えてゐる頃、私は、中學校を卒業して、高等學校に入學するまでの數ヶ月を家郷に送つてゐる時でありましたので、又、久しぶりに、父の指導を受けて、毎夜二時か三時頃、此の彗星を見たものです。——明治40年の9月、私は第三高等學校に入り、其の後今日まで永く京都の地に住んで居ます。

前にも記した如く、父が私を天文現象へ導いたのは、單に好奇心以外の何物でもありません。決して私を天文の専門家に仕立て上げる目的ではな

かつたのです。其の證據に、私が高等學校の工科から轉じて帝國大學の理科に入つた時、殊に理科の中の天文學を專攻しやうと決心した時、父は可なり驚いたやうです。そして、出來れば、天文を思ひ止まつて、始めからの志望である工科をやらせたかつたらしいのです。しかるに不孝者の此の私は一心に決めた事を翻へすことを知らず、父に危まれながらも、遂に天文學專攻のまゝ、大學を卒業して了ひました。——しかし、考へて見るに、私をして天文に興味を持たしめたのは、言ふまでも無く父其の人であつて、只一回や二回に止らず、頑是無い幼年時代から青年期に至るまで、機會だにあれば、自身も楽しむ天の珍象を、我が子にも見せやうとした結果、こんな不孝者が出來て了つたのです。晩年には、父も諦めてか、別に不満らしいことを言ひませんでした。

後年、若し私が天文學者として大成するならば、それは今地下に在す父の功であります。若し然らずして私が單なる凡才に終るならば、其の責任は全く此の不孝兒にあるのです。（1927・10・20. 父の忌の三週目——郷里にて）

## 十二月八—九日の皆既月食

12月8日から9日にうつる眞夜中過ぎから皆既月食が見られる。その時刻は各地皆一齊に起る譯で中央標準時でいへば

初虧 9日 0時 51.5分

月食各時刻の方向

食既 1 54.5

食甚 2 34.6

生光 3 14.9

復圓 4 17.7

臺灣などでは西部標準時を用ゐるからこれより夫々一時間早い時刻に起るから最初の虧け初めは8日の23時 51.9分といふ時刻で8日

	初 虧	食 既	生 光	復 圓
台 北	23°	145°	36°	198°
京 城	46°	175	57	215
那 覇	1°	147	39	201
京 都	17	164	52	213
東 京	13	163	53	214
札 幌	26	175	63	222

9日に跨つてゐることになる。虧ける方向は眞上から東へ計つた角度で表せば各地で少し宛異なる譯で次の様になる。（上田）